平成30年産「アルプス米」てんたかく・てんこもり栽培こよみ（JA米）

高温に強い品種の導入による作期分散！

アルプス農業協同組合
アルプス農協管内農業技術者協議会

てんたかく

収量構成の目安　（560kg／10a）

収量構成	目安	収量構成	目安	収量構成	目安
㎡当たり穂数（本）	450	㎡当たり着粒数（粒）	29,000	玄米千粒重（g）	22
1穂着粒数（粒）	65	登熟歩合（%）	88		

ステージ：4月 育苗期／5月 5/5 田植え 活着期／6月 有効分げつ期 無効分げつ期／7月 7/1 幼穂形成期 穂ばらみ期 7/23／8月 登熟期 成熟期 8/28／9月

作業日程の目安

葉色の推移（葉色カラースケール）：5.0 ／ 4.0 ／ 幼穂形成期 4.0～4.5（4.0を下回らない）／ 穂揃期 4.5

5/5 田植え → 浸種 3/31 → 播種 4/12 → 搬出 4/15 → 5/5 田植え → 除草剤散布 → 軽い田干し → 5/27～31 溝掘り → 6/5～10 中干し → 加里散布 → 7/1 穂肥① → 7/8 穂肥② → 防除① → 7/23 出穂 → 防除② → 防除③ → 8/23～25 落水 → 8/28 刈取り

7月上旬 一斉草刈り

品質向上は「土づくり」から
■土壌改良資材の施用基準

資材名	標準施用量(kg/10a)
粒状ケイカル	200
元気	100
シリカロマン	100
シンキョーライトP	100

■深耕しの実施
現状＋3cmで15cm以上の作土層確保

管理のポイント

土づくり
- 稲わらの腐熟促進のため、秋耕しを行い、排水溝を掘る。
- 土づくり資材や堆肥を施用する。
- 1.9㎜のふるい目を使用し、選別を徹底する。
- 水分14.5～15.0%に仕上げる。

適正な乾燥調製
- 籾黄化率85～90%頃に刈り取る。
（●高温年は80%から）

適期収穫
- フェーン時はあらかじめ入水する。
- 刈取り予定日の5～7日前まで間断かん水を行う。

収穫までの水管理
- 生育ステージに合わせて防除を実施する。

防除の徹底
- ●3回目は傾穂期
- ●2回目は穂揃期

出穂後20日間の湛水管理
- ●1回目は出穂始め（必須）

草刈りの徹底
- 7月上旬までに畦畔や雑草地の草刈りを終える。

- 葉色が淡い場合は、出穂前に追加穂肥を施用する。
- 2回目穂肥は1回目穂肥から1週間後を目安に施用する。
- 1回目穂肥は葉色と幼穂長1～2㎜を確認してから施用する。

適正な穂肥

幼穂形成期から飽水管理
- 6/20頃に「エスアイ加里らくだ」または「珪酸加里」を施用する。

中干し後は幼穂形成期まで間断かん水
- 中干しは強すぎないように注意する。
- ●田植え1か月後頃を目安に開始する。

中干しは適期に開始
- 5mに1本を目安に溝を掘る。

溝掘りは確実に
- 活着後は、浅水管理をする。
- 植付深さは3㎝。
- 植付本数は株当たり3～4本。
- 栽植密度は坪当たり70株を確保する。
- 苗箱施薬による防除を実施する。
- 基肥は基準量を守る。

- 田植え時期に応じた計画的な育苗を行う。

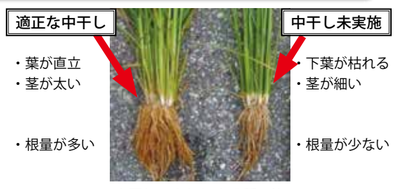
健苗育成
- 代かきは、均平に努め、練りすぎに注意する。
- ゆっくりと耕起し、作土を15㎝以上確保する。

耕起・代かき
確実に施用する。
- 秋施用ができなかった場合は、土づくり資材を

土づくり

溝掘りと田植え１か月後頃からの中干し

○中干しが遅れると、**弱勢分げつが多く発生**したり、**根が少なくなり品質が低下**しますので**田植えの１か月後**を目安に、遅れないよう中干しを開始する。
○中干し開始前には、圃場全体へ入排水を短時間で均一に行うため、溝を設置する。

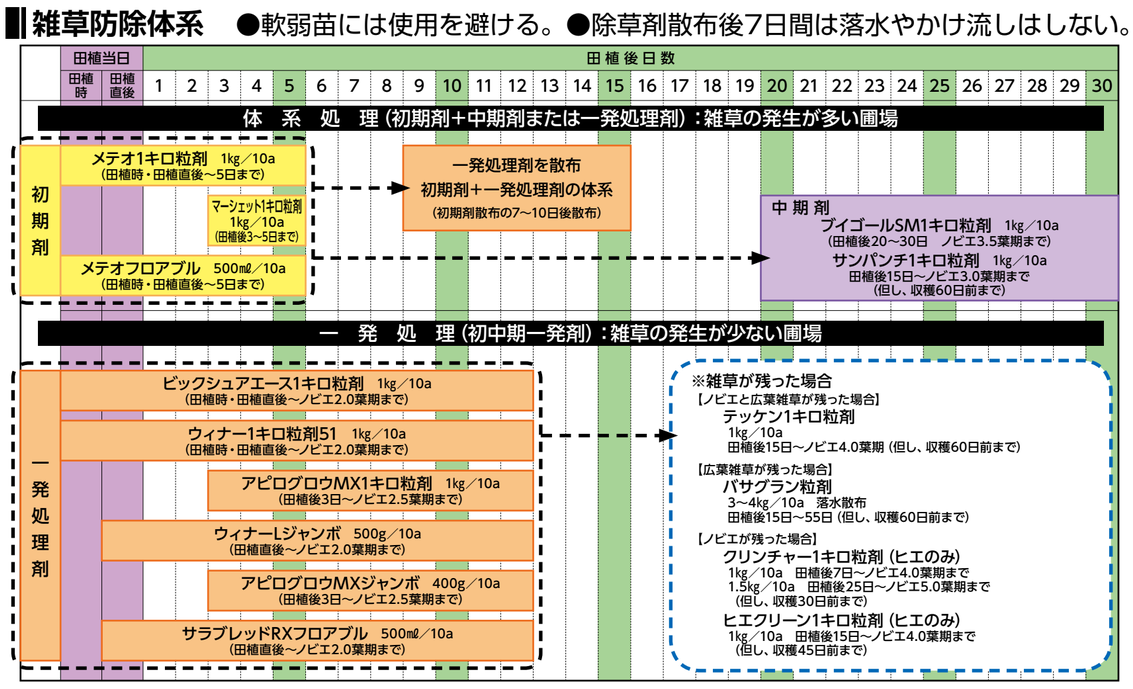


中干しの有無による稲の姿

乗用管理機での溝掘り

除草剤散布は遅れずに

雑草防除体系　●軟弱苗には使用を避ける。●除草剤散布後7日間は落水やかけ流しはしない。



初期除草剤の適正使用
㋐代かきから田植えまでの日数を長くしすぎない。
㋑軟弱苗の使用や極端な浅植えを避け、適切な水管理を行う。
㋒薬害軽減のため、初期除草剤マーシェット1キロ粒剤は移植後3日以降の使用とする。
●田植同時除草剤は、薬害を受けやすいことから、上記㋐㋑を守り田植後の入水をゆるやかに行う。

カメムシ防除の徹底で被害を防止!!

○基本防除を適期に行い、防除間隔は７日間を目安とする（10日以上あけない）。
○畦畔等のイネ科雑草の穂が出る前までに草刈りを行う。
○麦跡等の不作付地は、大豆、園芸作物、緑肥等の栽培を行う。
○飼料用米や飼料用稲では、主食用米の栽培圃場に準じて水田や畦畔の除草を行う。

病害虫防除体系

【育苗基本防除】・苗箱施薬剤は、**規定の薬量（50g/箱）を厳守**し、箱全体に均一に散布する。

薬剤名	散布量	使用時期	対象病害虫
ルーチンアドスピノ箱粒剤	50g/箱	播種時（覆土前）～移植当日	いもち病、白葉枯病、イネミズゾウムシ、イネドロオイムシ、ニカメイチュウ、フタオビコヤガ、ウンカ類、ツマグロヨコバイ
Dr.オリゼフェルテラ粒剤	50g/箱	緑化期～移植当日	いもち病、イネミズゾウムシ、イネドロオイムシ、ニカメイチュウ、フタオビコヤガ、ツマグロヨコバイ、（白葉枯病）
※紋枯病の常発地の場合 エバーゴルワイド箱粒剤	50g/箱	播種時（覆土前）～移植当日	いもち病、白葉枯病、**紋枯病**、イネミズゾウムシ、イネドロオイムシ、ニカメイチュウ、フタオビコヤガ、ウンカ類、ツマグロヨコバイ

※対象病害虫の（　）内は移植３日前～移植当日のみ登録あり

てんたかく【本田基本防除】＜粉剤、液剤体系＞

防除時期	出穂始め（てんたかくは必須）	穂揃期	傾穂期
粉剤	バリダジョーカー粉剤DL 4kg/10a（収穫14日前まで）	ラブサイドキラップ粉剤DL 4kg/10a（収穫14日前まで）	スタークル粉剤DL 3kg/10a（収穫7日前まで）
液剤	バリダシン液剤5 1,000倍（収穫14日前まで）＋ MR．ジョーカーEW 2,000倍（収穫14日前まで）	ラブサイドフロアブル 1,000倍（収穫7日前まで）＋ キラップフロアブル 1,000倍（収穫14日前まで）	スタークル液剤10 1,000倍（収穫7日前まで）
	使用液量：150ℓ/10a	使用液量：150ℓ/10a	使用液量：150ℓ/10a
対象病害虫	ウンカ類、ツマグロヨコバイ、カメムシ類、紋枯病等	いもち病、カメムシ類、ウンカ類	カメムシ類、ウンカ類、ツマグロヨコバイ

てんこもり【本田基本防除】＜粉剤、液剤体系＞

防除時期	随時防除		基本防除	
	紋枯病の発生が多い圃場	紋枯病＋カメムシが多い圃場	穂揃期	傾穂期
	出穂7日前頃	出穂始め（随時）		
粉剤	バリダシン粉剤DL 4kg/10a（収穫14日前まで）	バリダジョーカー粉剤DL 4kg/10a（収穫14日前まで）	ラブサイドキラップ粉剤DL 4kg/10a（収穫14日前まで）	スタークル粉剤DL 3kg/10a（収穫7日前まで）
液剤	バリダシン液剤5 1,000倍（収穫14日前まで）	バリダシン液剤5 1,000倍（収穫14日前まで）＋ MR．ジョーカーEW 2,000倍（収穫14日前まで）	ラブサイドフロアブル 1,000倍（収穫7日前まで）＋ キラップフロアブル 1,000倍（収穫14日前まで）	スタークル液剤10 1,000倍（収穫7日前まで）
	使用液量：150ℓ/10a	使用液量：150ℓ/10a	使用液量：150ℓ/10a	使用液量：150ℓ/10a
対象病害虫	紋枯病等	ウンカ類、ツマグロヨコバイ、カメムシ類、紋枯病等	いもち病、カメムシ類、ウンカ類	カメムシ類、ウンカ類、ツマグロヨコバイ

土壌に応じた適正な施肥量を

てんたかく 施肥基準（5/5植え）※側条施肥の場合

土壌区分	基肥一発体系 肥料名	施用量(kg/10a)	分施体系 基肥 肥料名	施用量(kg/10a)	穂肥 肥料名	施用量(kg/10a) 1回目	2回目
砂壌土	LPs 早生専用	40	基肥206 又は 基肥555	40 35	追肥3号	10	13
壌土・黒ボク		35	基肥206 又は 基肥555	35 30		10	12
粘質土		30	基肥206 又は 基肥555	30 25		10	10

てんこもり 施肥基準（5/10植え）※側条施肥の場合

土壌区分	基肥一発体系 肥料名	施用量(kg/10a)	分施体系 基肥 肥料名	施用量(kg/10a)	穂肥 肥料名	施用量(kg/10a) 1回目	2回目
砂壌土	LPss 晩生専用	45	基肥206 又は 基肥555	45 40	追肥3号	13	13
壌土・黒ボク		40	基肥206 又は 基肥555	40 35		10	12
粘質土		35	基肥206 又は 基肥555	35 30		10	10

生育量を確保するために、基肥量はしっかりと施用する。

積極的に利用しましょう！
◎高品位・低コスト生産にカントリーエレベーターを

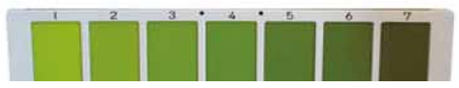
てんこもり

収量構成の目安　（600kg／10a）

収量構成	目安	収量構成	目安	収量構成	目安
㎡当たり穂数（本）	450	㎡当たり着粒数（粒）	31,000	玄米千粒重（g）	22.5
1穂着粒数（粒）	70	登熟歩合（%）	85		

ステージ：4月 育苗期／5月 5/10 田植え 活着期／6月 有効分げつ期 無効分げつ期／7月 7/14 幼穂形成期 穂ばらみ期 8/7／8月 登熟期 成熟期 9/19／9月／10月

作業日程の目安



葉色の推移（葉色カラースケール）：5.0 ／ 4.0 ／ 幼穂形成期 4.0～4.2（4.0を下回らない）／ 穂揃期 4.5

5/10 田植え → 浸種 4/8 → 播種 4/18 → 搬出 4/21 → 5/10 田植え → 除草剤散布 → 軽い田干し → 6/3～5 溝掘り → 6/10～15 中干し → 加里散布 → 7月上旬 一斉草刈り → 7/14 穂肥① → 7/24 穂肥② → 防除 → 8/7 出穂 → 防除① → 防除② → 9/12～14 落水 → 9/19 刈取り

品質向上は「土づくり」から
■土壌改良資材の施用基準

資材名	標準施用量(kg/10a)
粒状ケイカル	200
元気	100
シリカロマン	100
シンキョーライトP	100

■深耕しの実施
現状＋3cmで15cm以上の作土層確保

管理のポイント

土づくり
- 稲わらの腐熟促進のため、秋耕しを行い、排水溝を掘る。
- 土づくり資材や堆肥を施用する。
- 1.9㎜のふるい目を使用し、選別を徹底する。
- 水分14.5～15.0%に仕上げる。

適正な乾燥調製
- 籾黄化率85～90%頃に刈り取る。
（●高温年は80%から）

適期収穫
- フェーン時はあらかじめ入水する。
- 刈取り予定日の5～7日前まで間断かん水を行う。

収穫までの水管理
- 生育ステージに合わせて防除を実施する。

防除の徹底
- ●2回目は傾穂期
- ●1回目は穂揃期

出穂後20日間の湛水管理

- 葉色が淡い場合は、出穂前に追加穂肥を施用する。
- 2回目穂肥は1回目穂肥から10日後を目安に施用する。
- 1回目穂肥は葉色と幼穂長1～2㎜を確認してから施用する。

適正な穂肥

幼穂形成期から飽水管理
- 7月上旬までに畦畔や雑草地の草刈りを終える。

草刈りの徹底

中干し後は幼穂形成期まで間断かん水
- 6/20頃に「エスアイ加里らくだ」または「珪酸加里」を施用する。

- 中干しは強すぎないように注意する。
- ●田植え1か月後頃を目安に開始する。

中干しは適期に開始
- 5mに1本を目安に溝を掘る。

溝掘りは確実に
- 活着後は、浅水管理をする。
- 植付深さは3㎝。
- 植付本数は株当たり3～4本。
- 栽植密度は原則坪当たり60～70株を確保する。
- 苗箱施薬による防除を実施する。
- 基肥は基準量を守る。

- 田植え時期に応じた計画的な育苗を行う。

健苗育成
- 代かきは、均平に努め、練りすぎに注意する。
- ゆっくりと耕起し、作土を15㎝以上確保する。

耕起・代かき
確実に施用する。
- 秋施用ができなかった場合は、土づくり資材を

土づくり